

東京バッハ合唱団 月報

[第 660 号] 2017 年 6 月号

〒156-0055 東京都世田谷区船橋 5-17-21-101

Tel: 03-3290-5731 Fax 専用: 03-3290-5732 郵便振替: 00190-3-47604

Mail: office@bachchor-tokyo.jp http://bachchor-tokyo.jp/

BACH-CHOR, TOKYO

Monthly Newsletter No.660

June 2017

5-17-21-101 Funabashi,
Setagaya-ku, Tokyo

随想：合唱団の創立 55 周年を迎える

地球上に生を得て

大村 恵美子（主宰者）

去る 3 月 9 日の私の誕生日を中心に、また数々の、共生の深い体験を得ることが出来ました。核で相互に滅ぼしあう予兆のような大事件が、世界各地にまざまざと見せつけられる姿で続発する中で、私自身の周辺では、穏やかに病いの果てに向きあっている人々を見つめ、合唱団の仲間との浮きうきとした遠足の日を味わい、マスコミでは、想像を絶するほどの苦しみ・悲しみや、はたまた歓喜や不安に直面する人々のドキュメントに心を富まされ、いくつもの新刊書の贈与を受けて、こんな現在に、これだけの深さ・すばらしさに生きる同時代の友々に、視野を開かされて、この春は本当に幸せな日々を過ごしています。

こんなさなか、1988 年に 88 歳で他界した私の母の誕生日（3 月 17 日）の前夜に、私の見た夢は、このような現状を反映して生き生きとしたものでした。もともと、私の多くの夢は、仲間と一緒に、明暗こもごもの旅物語が基本内容となるのですが、この日もそれで、ヨーロッパのどこか丘陵地帯の教会宿泊施設に、20～30 人位のメンバーと滞在する、その初日の模様でした。平和でなだらかな町に辿りついて、みんなの顔は安堵に包まれ、この地で、初めて接する住民の方々との交歓を果たそうと、心から期待していました。文明がオープンな形で地球を蔽うことになった 21 世紀には、こんな幸せが待っていてくれたのだ。互いの疑惑を遠ざけ、「殺し合いは、人類にとって避けられない運命だ」という、自分でとらわれている邪念を、こわごわとでなく、こう進めば必ず届く、という信念をもって崩してゆこう。——これが、この朝の夢に励まされて目ざめた私の気分でした。

〈満ち足れり〉、これこそ、J. S. バッハの、私たちに託された音楽の遺産なのです。日本は、250 年間もの不戦をやり遂げた江戸時代を誇る平和国家だったのだと云われます。でもそれは、周到冷酷に人質制度と罰則で固められ、権力者側におどされ続けてきた、人権無視の日々だったのでしょう。わが国では、今でも「さむらい」が文句なしのホメ言葉のように用いられていますが、じつは私の感覚では、武士道や侍は、「大君の辺(へ)にこそ死なめ、かえり見はせじ」と歌い上げる信時潔の、一世風靡の名曲に心底つよめられた、けな

げな奴隷の心境に近いように思われて、ちっともプライドとは結びつきません。自分自身の意志からではなく、与えられて生まれた境遇から、身の置きどころと決められた上司への忠誠であって、その上司が何らかのなりゆきで代わると、これまで憎い敵将だった者にさえ、又もや、前と劣らぬごとき献身一途の侍（さむらい）として仕え、寄り添ってしまう。不変の自己・不変の神だけに貫きとおす、不屈の意志には乏しいのです。それゆえに、公人だろうと私人だろうと、すぐばれるような嘘も、その場の勢いに従って、平気で口をつけて出てくるのです。地域愛ではない、国籍や民族別の団結ではない、地球規模、まさにグローバルな態度こそが、人類の破滅を救うものなのではないでしょうか。これが、わが合唱団の創立 55 周年を迎える私の、率直な思いです。

（この 55 年間の活動を、超高速でふり返る「別冊：創立記念日の思い出を中心にたどる」を、当月報に添付いたしました。あわせてお目通しいただければ幸いです。O. E.）

合唱団創立 55 周年記念、演奏会と祝会

後援会・団友、OB/OG、ご常連の皆さん
ぜひともご参加いただき、
私どもの 55 周年を、一緒に祝いください

[日時] 7/1 (土) 14:00～17:00、開場 13:30

[会場] 日本キリスト教団 荻窪教会

・『キラキラ星変奏曲』（松尾茂春・詞/曲）

・《ロ短調ミサ曲》より、〈キリエ〉第 2、〈グローリア〉

〈肉をとりて〉〈十字架に〉〈主は甦りたもう〉など

オルガン：小久保美希、合唱：東京バッハ合唱団

[演奏会] 入場無料

[祝会参加] 会費 500 円（軽飲食あり、要予約）

[参加申込み/問合せ] 事務局（上掲タイトル囲み参照）

月報 6 月号 CONTENTS

- ・要約『カントル・バッハ』連載 [3]
偉大なオルガニスト（ヴァイマル）（松尾茂春）… p. 2
- <別冊>（全 4 ページ）
- ・創立記念日の思い出を中心にたどる（大村恵美子）

要約『カントル・バッハ』 連載 [3]

マニーフィカト (わが魂は主をあがめ)

ポール・デュ・ブシェ [著]

大村 恵美子 [訳]

要約・紹介：松尾 茂春 (団員)

<内容>

第1章：ルターのもとでのヨーハン・セバ스티アン
(マルティン・ルター、先祖たち、誕生～リュネブルク時代)

……連載 [1]、月報 653 号 (2016 年 11 月号)

第2章：修業時代 (アルンシュタット、ミュールハウゼン)

……連載 [2]、月報 655 号 (2017 年 3 月号)

◆第3章：偉大なオルガニスト (ヴァイマル)

……連載 [3] (今回)

第4章：ブランデンブルク協奏曲 (ケーテン)

第5章：カントル・バッハ (ライプツィヒ)

第6章：音楽の献げもの (フリードリヒ大王の客人、歿後)

第3章

偉大なオルガニスト (ヴァイマル)

バッハは 1708 年 7 月、ザクセン-ヴァイマル公ヴィルヘルム・エルンストの礼拝堂オルガニストの職を得てヴァイマルに落ち着きます。すでに数多くのジャンルの作曲を試みていたバッハですが、その名声はむしろオルガン演奏においてテューリンゲンの国境を超えていました。

町の人口で比べると、アイゼナハ：7500 人、ミュールハウゼン：4000 人と比べ、ヴァイマル：5000 人は当時として格別大きくもなく、重要でもありませんでしたが、そこには啓蒙的な専制君主、ザクセン-ヴァイマル公の居城があり、1 世紀を経てゲーテとシラーの時代に「ドイツのアテネ」となるべき胚芽があり、今まさに文化の風が吹き始めるところでした。

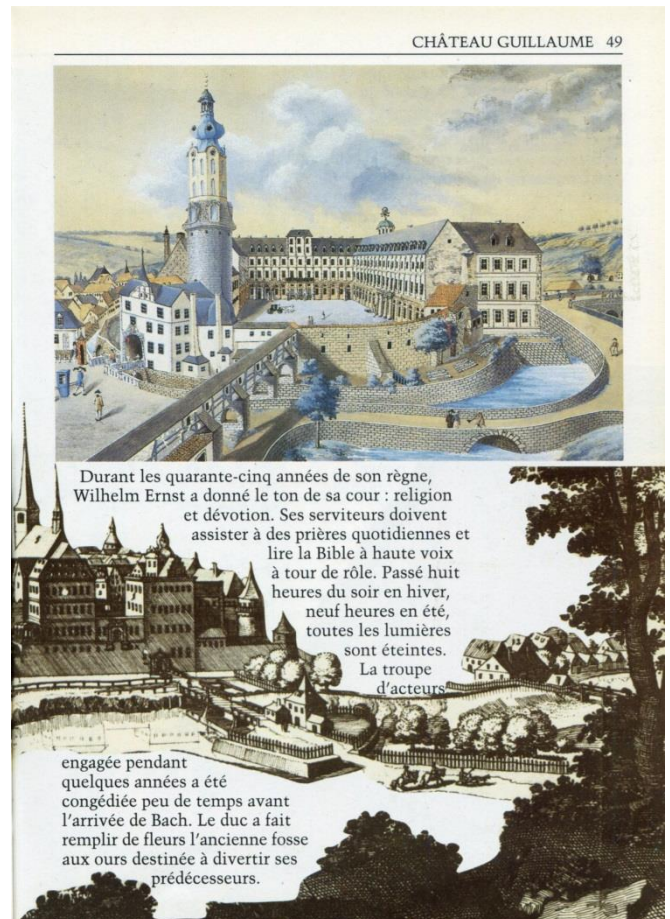
・ヴァイマル、厳格な宮廷

ヴィルヘルム・エルンスト公は正統的な国教会の創立と保護に注力し、文化と芸術も大切にしました。公がみずから選んだ標語 "Alles mit Gott" (すべては神と共に) がそれを物語っています。

公は公国の拡張や他国との同盟締結、保護下にある地域の経済の改善等に気遣うことはなく、宗教と文化に傾倒——オペラ団を養成し、上質の宮廷音楽家たちを任命し、図書館と古銭学の陳列室を作りました。

・世俗音楽と宗教音楽の総合

バッハは公爵礼拝堂のオルガニストであると同時にヴァイオリン(むしろ公が偏愛したヴィオラ)奏者、室内オーケストラのチェンバロ奏者でもありました。



■「……そこには啓蒙的な専制君主、ザクセン-ヴァイマル公の居城があり、1 世紀を経てゲーテとシラーの時代に「ドイツのアテネ」となるべき胚芽があり、今まさに文化の風が吹き始めるところでした。」

(原書 Paule du Bouchet, Magnificat: Jean-Sébastien Bach, le Cantor. の当該ページの体裁はこんな感じ)

室内楽や協奏様式が熱心に開発される中であっても、信仰、音楽両面で熱心な公のもとで、宗教音楽は第一の位置を維持しました。信仰の感情表現に音楽が主要な位置を占めるという考えで一致した公とバッハは相互に好感をもち、バッハは芸術家の自由を得ます。バッハは年俸 225 フロリン (ミュールハウゼン時代のほぼ 2 倍) と小麦粉、薪などを得ました。バッハにとっては、お金は、神が与え、音楽が歌うことを可能にしてくれる大事な贈り物なのです。

彼は家計簿を慎重に扱いました。バター、衣類の見積もり、ワイン (予算の中で重要な位置を占める)。それで新しい楽器を高値で買い入れることができ、生涯の終わりにはチェンバロとクラヴィコード 5 台、リュート・チェンバロ 2 台、スピネット 1 台、ヴァイオリン 2、ヴィオラ 3、チェロ 2、バス・ヴィオール 1、ヴィオラ・ダ・ガンバ 1、リュート 1、ピッコロ 1 を所有することになります。

・天才オルガニスト

バッハはよその宮廷で演奏することを許され、ドイツ中の都市で知られるようになります。しかしそれはオルガン演奏の天才としての評価であり、作曲家としてはラインケン、クーナウ等の作曲家ほどの評価も与えられていませんでした。

目も眩むばかりのバッハの演奏技術は「彼の足はまるで羽が生えているかのように足鍵盤の上を飛び回り、力強い音は雷鳴のように教会堂をよぎって鳴り響いた。大きな驚嘆と驚愕が、君臨する（プロイセン）王子フリードリヒを満ちし、音が鳴りやむと、彼は高価な宝石で飾られた指輪を指から外して、バッハに与えた」と描写されました。しかしこのような感情の誇示に苛立ち、演奏を称賛されたバッハは「必要な瞬間に、必要な音をたたきさえすれば、それでよいのです」と言い切ります。専念するためには、今この瞬間の、極度の集中のみを神は求める、というこの不動の確信が常にあったのです。

全生涯のあいだに、バッハは 50 台ほどの様々なオルガンを演奏することとなります。

・ハレで新しい地位が提示される

当時ハレの町にある聖母教会では、クリストフ・クンツィウスのもとに 63 個の音栓を備えた新しいオルガンの建造が行われていました。ヘンデルの師であるヴィルヘルム・ツァハウの死により、ハレのオルガニストの席が空席になり、その公募に心惹かれたセバスティアンは試験曲に自作のカンタータを 1 曲演奏します。試験官たちは圧倒されて契約を提示しました。しかし、その俸給がヴァイマルでの年俸より 30 フロリンも少ないこともあってそれは返上され、結果としてバッハを失いたくないヴァイマル公が年俸を引き上げ、バッハを「コンツェルト・マイスター」、すなわちオーケストラ指揮者に任じることにつながります。その役割として毎月 1 曲の新しいカンタータの作曲と演奏が義務づけられ、20 数曲の大カンタータが日の目を見ることになったのです。そのうち何曲かは公爵の図書館司書だったザーロモン・フランクのテキストによるものでした。

公爵の室内オーケストラでバッハは自身でヴァイオリンを奏しながら、あるいは筒状に巻いた楽譜で拍子を取りながら、オーケストラを指揮して自身の作品をしばしば演奏するようになります。

・かくも長き歴史

オルガンという名前は「道具」あるいは「器具」を意味するギリシャ語 *organon* に由来し、その起源は紀元前 3 世紀に遡ります。水力に始まり紀元後 3 世紀頃に風力オルガンが発明されたと言われます。ギリシャ人、ローマ人によって世俗的な楽器として実用化された後、教会教父たちにより排斥され、8 世紀に再び姿をあらわすものの、14 世紀までは盛儀用あるいは宮廷内の世俗的楽器でした。

ルネッサンス期になると国家的な大きな楽派が形成されました。一方はイタリア、イギリス、スペイン、他方では、アルプスの北に位置するヨーロッパの国々です。

・イタリア・コンチェルト音楽の発見

いくつかの友情が結ばれます。ヴァイマルの「ギム

ナジウム」の副校長である J. マティアス・ゲスナーはセバスティアンの最大の崇拜者となりました。同僚の一人でいともあるオルガニストの J. ゴットフリート・ヴァルターは音楽探求に情熱を傾け、セバスティアンと一緒にイタリアの巨匠たち、コレルリ、トレルリ、レグレンツィ、アルビノーニ、マルチェロ、とりわけヴィヴァルディとフレスコバルディらの協奏曲を編曲します。

・ヴィヴァルディとヴァイオリンの言語

ヴィヴァルディに魅せられたバッハはそのヴァイオリン協奏曲を 16 曲のチェンバロ用と 5 曲のオルガン用の独奏協奏曲に編曲しました。イタリア音楽にひたった結果、バッハの書法はしなやかになり、均衡にも到達します。またそれは音楽主題の開発に論理と構造をももたらし、バッハはそれらの様式を並置していきま。《トッカータ》ハ長調ではドイツのトッカータ様式をイタリアの協奏曲様式に結合させています。25 歳から 30 歳までのこの時期に、《トッカータとフーガ》ニ短調、《前奏曲とフーガ》ハ短調、《前奏曲》イ短調、《フーガ》ト短調など、オルガン作品の奇跡的な最高傑作が生まれました。

・友情、婚姻関係、血族関係

セバスティアンは旅をし、他の都市での演奏会を聴き、イエーナやアイゼナハで近くに住む親戚を訪問します。アイゼナハではその時代に最も高名な作曲家だったテーレマン(1681-1767)と出会い、次男カール・フリーリップ・エマーヌエルの代父になってもらうほどの友情で結ばれます。

バッハのもとには弟子たちが大勢集まりました。セバスティアンは伝統的な義務である教育をまず一族の年若い人たちに始めました。4 人の子供たち、たくさん弟弟子たち、一緒に生活していた妻の妹、ひっきりなしの訪問客などでバッハの家は、後に C・Ph・エマーヌエルが言ったように「巣箱のようで、しかも生命に満ち溢れて」いたのです。

・〈初心者に指針を与えるためのオルガン小曲集〉

教育に余念のないバッハは、1717 年を通して、練習に寄与するための作曲の最初の重要なシリーズとなる《オルガン小曲集》にかかりきります。その献辞は「全能の神には榮譽を帰すために、隣人には教えるために」——とりなし人であることを自覚したバッハの役割の 2 つの面が表れています。神への服従という場ではルターの教訓が活かされており——福音書を深く読むこと、イエスを模倣すること——そして模倣によって完成に近づけるという教育者の役目を意識しているのです。バッハは神聖な原理を音楽的に伝達することができると信じ、実践します。自分の知恵の花を弟子たちに分け与え、弟子たちから愛されました。

・〈弟子たちに学ばせた最初のことは、チェンバロに触れる彼の個人的な方法だった〉

C・Ph・エマーヌエルは、フォルケルの声を通して貴重

な証言を残しています。

「彼は何か月ものあいだ、両手の全部の指が常に透明で明晰な音をつくり出すことを心がけながら、個別に動かせるようにする練習だけを命じた。どんな弟子に対しても、これらの練習を省くことはなく、それは6ヵ月から12ヵ月も続いた。しかし誰かが忍耐を失いかけたと見ると、それらの練習を組み合わせたような小品を書く労をとるのだった。このようにして《初心者のための6曲の小前奏曲》と《15曲の2声のインヴェンション》が作曲されたのである。彼は、レッスンを授ける間にこれらの作品を作曲し、その時は、弟子たちが必要とすることしか考慮していなかったのだ。[……] 彼は同じように、2本の手による装飾音の練習も命じた。」

・諸侯たちの論争

ヴァイマルでもセバステイアンは身分の高い弟子たちを擁していました。その一人、公爵の直系の甥で後継者であるエルンスト・アウグストはよい音楽家、チェンバリストである一方でいやな性格の持ち主でもありました。彼は時代に合わない政治理念を荒々しく主張し、叔父の政府をあからさまに非難しますが、さしあたって二人の間の諍いはまだ潜在的なものでした。

バッハはエルンスト・アウグストの居館である「赤い城」で大部分の時間を過ごしていました。そこでは活発な音楽生命が支配していましたが、この友情が致命的なことに繋がってしまいます。ヴァイマル公は甥に対する不満から音楽家たちが甥のところで演奏することを禁じ、バッハはこれを拒み、無視します。機嫌を損ねた公爵は、老いたカペルマイスターであったドレーゼの死去に伴う後任として、順当な選択といえるバッハではなく、まずテーレマンの就任を試み、結局は凡庸なドレーゼの息子ヨーハンを抜擢したのです。バッハは深く傷つき、若い公子への傾倒を公にし、ヴィルヘルム・エルンストのためにカンタータを書くことをやめてしまいます。

このような中、ヴァイマルを去りたいと考えるようになったバッハに、まもなく機会が訪れます。1717年8月、エルンスト・アウグストの義兄で、大の音楽愛好家であるアンハルト・ケーテン侯が、バッハにカペルマイスターの地位を提供、バッハはそれを受諾します。

・フランス式果たし合い

9月になってバッハは有名なフランス人オルガニスト・作曲家のルイ・マルシャンを聴きにドレスデンに向かいます。その出会いによって期待されたのは対抗試合——フランス人とドイツ人との1対1対決という予想は大勢の人々の心を惹きつけました。しかしバッハが聴衆の前に姿をあらわした時にマルシャンの姿はなく、使者によれば当日朝に町を去ったとのこと。不戦勝となったバッハは一人で演奏し、人々の記憶に残りました。

ヴァイマルに戻ったバッハは辞職願を出し、弟子シューバルトが後を継ぐこととなります。しかしヴァイマル公は怒り、バッハを監禁し、断念させようとした。だが、バッハは平静に、強情に、1ヵ月足らず（11月6日～12月2日）の間、牢の中で《オルガン小曲集》の46のコラールを校正しながら過ごし、得るところないことを悟った公はバッハを釈放しました。

[1997年に行われた東京バッハ合唱団第4回ヨーロッパ演奏旅行では、アイゼナハ（ゲオルク教会）での演奏会翌日、ライプツィヒへの移動前日となる8月11日（月）にバッハゆかりの町々を訪問し、短時間でしたがこのヴァイマルにも立寄りしました。]

[つづく]

連載第1回、第2回のバックナンバーは、HPでご覧いただけます。
⇒ http://bachchor-tokyo.jp/monthly_newsletter/index.htm
掲載紙の送付をご希望の方は、事務局へご連絡ください。

野尻湖 2017 ご案内

●公開ワークショップ(ご近所、滞在客のみなさんと)

[日時] 8月4日(金)、18:30~20:30 (開場 18:00)

[会場] 野尻湖公民館 (〒389-1303 長野県上水内郡信濃町野尻 303、電話 026-258-2113)

[入場] 無料 (ワークショップ参加は、要予約)

(駐車場完備。クルマでのご来場も可能です)

・コラール〈物見らの声に〉BWV 140/4

・コラール〈グロリア 主を讃えん〉BWV 140/7



フィリップ・ニコライの有名なコラールを素材に、バッハの4声部合唱のハーモニーを体験します。初心者も楽しい、日本語のバッハです。見るだけ・聴くだけでも歓迎。

指導=山本悠尋、伴奏=鈴木真帆

■YAMAMOTO Yukihiko, Bariton

●コンサート“湖畔で聴くバッハ”

(東京バッハ合唱団・第42回神山教会特別演奏会)

[日時] 8月5日(土)、16:00~17:30 (開場 15:30)

[会場] 野尻湖国際村・神山教会 (NBAホーテリウム)

(〒389-1304 長野県上水内郡信濃町神山国際村。クルマの進入はご遠慮いただきます。詳細は合唱団事務局までお訊ねください)

・合唱: カンタータ 187 番《待ち望む みななれを》より

・ピアノ独奏: 《最愛の兄に寄せるカプリッチョ》(鈴木真帆)

・合唱: 《ロ短調ミサ曲》より

バリトン=山本悠尋

ピアノ独奏/伴奏=鈴木真帆

合唱=東京バッハ合唱団

指揮/訳詞=大村恵美子



[入場] 無料

■SUZUKI Maho, Piano

ワークショップ予約と全体のお問い合わせ

東京バッハ合唱団事務局

電話 03-3290-5731、メール office@bachchor-tokyo.jp

<http://bachchor-tokyo.jp/>